

財団助成事業

アシヨカ・ジャパン「東北ユースベンチャー」キックオフイベントを取材

3・11震災の後、岩手県の小中高生対象のアンケートで、88%が「自分の町のために何かしたい」と答えた。アシヨカでは、その意志はエネルギーであると捉え、受け皿として「東北ユースベンチャー」構想が立ち上がった。

1月27日・28日には、仙台市にてキックオフイベントが行われ、中高大学生数十人と支援する社会人が集った。東京でもその翌日、1月29日に慶應義塾大学三田キャンパス内でイベントが開催され、財団も取材をした。

アメリカで、世界の女の子同士が助け合うベンチャーを立ち上げ、今回のメンターも務めるセジャル・ハティさんのスピーチと、二人の日本のユース・ベンチャーによる活動プレゼンテーションが行われ、社会変革に関心の高い多くの学生たちが交流を深めた。

セジャルはとてもかわいい小柄な女性だが、話し始めると本当にパワフルで、社会を変えたいという意思の強さがひしひしと伝わってくる。15歳で若い女性をエンパワーする活動組織(Girls Helping Girls)を立ち上げ、発展途上の少女たちの教育資金を集めたり、彼女たちが収入を生み出すための新しい事業を立ち上げたり、これまで20カ国・約3万人にインパクトを与えてきたパワーの持ち主なのだ。

しかしそんな彼女も、最初から社会意識を強く持っていたわけではない。拒食症で心も身体も苦しんでいた彼女を救ってくれたのが、同世代のレナという少女だった。「女の子同士が愛

セジャル・ハティさんは実際にお話してみると、とてもチャーミングで明るい女性。現在イェール大学3年生で、卒業後はまず医学部に進んで、それから新しい領域にも携わってみたいと話していた。



橋本湧貴さん(上)は中央大学杉並高校在籍。慶應義塾大学総合政策学部進学予定。2011年のユースベンチャーに参加し、八丈島の活性化プランをプレゼン。現在も継続して活動中。

金亨喆さん(右)は、慶應義塾大学法学部政治学科在学。在日コリアン3世として生まれ高校まで朝鮮学校で学ぶ。2010年に「外国人と社会を繋ぐ」を理念に学生団体Shakrを立ち上げた。



しい、サポートしあえば、世界中の女の子が生き生きと生活できるはず」と、この事業にチャレンジすることになったのだ。

セジャルの話しは、同世代の日本の高校生や大学生を、大いに刺激したはずだ。

橋本湧貴さんと金亨喆さん、ふたりのユースベンチャーも、自分たちの原体験に基づき活動プロジェクトを発表。まだ始まったばかりだが、必ず成功させるという意気込みは伝わった。特に、金さんの「フェイスブックの(いいね)ボタンを「Thank you」に変えたい」との提案には共感の声が上がっていた。

推進責任者の渡辺奈々さんは、今後は福島県、岩手県にもプログラムを拡張し、2016年までに1万人以上の若者にリーチし、ボランティアや大人の支援者数万人も、チェンジメーカーに巻き込んでいきたいとのこと。彼女の「言うだけではだめ、アクションしなければ」の言葉が印象に残った。

「若者が変わる、大人が助ける」ユースベンチャーは、生涯学習財団の趣旨に照らしても有意義な活動であり、今後とも応援していきたい。

◆アシヨカとは  
アシヨカは、1981年より70ヶ国・27000人を超える社会起業家を発掘し、アシヨカ・フェローと認定・支援をしている。2011年にアシヨカ・ジャパンが設立された。

◆ユースベンチャーとは  
12才から20才の若者を対象に、将来のチェンジメーカーとして育てることを目的とする活動で、「社会のこころがおかしい」という小さな気づきの「種火」に空気を送り込み、点火することを目指す。日本では2010年春からスタート。